



お政七庚申去

周防徳山

福葉やちりよ交る衆神

也高

主あよあ〜くお島の夫

妻園

善母子一蓮母子死す時ちて

梅池

院死む〜乃思や〜

死白

陽心死すも彼の輝れ月

張芝

秋志一日死定ぬき虫

杏園

朝虫の良をうたふあちりて

教月

牙糸濡衣さるる極るん

也秀

友の奴と人乃口云戸さる守

魂風

比奈あたり死市の旅

政雲

寺云乃中より来志んを

如登

家ていたち子と母も同後

如跨

新は来よ思ぬ子さる苗まの月

又志





あまきり 記九卷の内 文芝

東西の乱法 くるる 子木 喜り

斗能安乃純き 追分 喜子

むすく口水 純宣 廿二日分 梅侯

胸をぬきまきあそ 柳 梅里

まご山の脊 びく 熊考 梅全

梅も卯能木も 一時まきく 可勝

弟士皆手を 拙し 浮空 可書

ゆふのささき 大行 高

あはるとる人 大系 志見坊 望

後生 大系 志見坊 望

福はれ 志見坊 望

袖を 志見坊 望

法眼 志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望

志見坊 望



めくさの目よきむらう葉種畑 暮り
 晴や足まのれはく足袋の砂 ち秀
 匠入り果々追わつ三日乃湯 鼓月
 あ西の子やらんまくあき一降 伝金
 蓮池のおまきさきし親の芳 梅子
 蓮あし控あさぬる控うふ 梅侯
 十代田の月静あり初陸 如弥
 月てぬ隈もれ寸猫の意 文志
 信ねおの人よはねあき去結 文芝
 伸て肉の減るる厥うふ 隆芝
 氷き日の隈を伸りる少梅 可三
 知人よあまありむの山 ます子
 ちさうりたる日もあ片都人 万施
 島子の揺も出さうりは新伝 麦屋
 舟高も大宅と出るは雲合 也高
 三徳力

庚申年去 周下徳地

竜福山の石橋を橋虎と号す
 初わや西日かやく橋乃互 新お
 柳と木瓜花ことり 其有
 むちりまきし乃はね織て 以竹
 踊ちむる月の夕 宜
 ちの尻もはささたさね葉の雲 望鶴
 嬉しと袖をばむ 海彦
 盗人の名をまぬく秋と筆 菊樹
 戸さうて橋くる島の家し 梧眠
 常友まいうある意のちやさく 伝伝
 独さしいき手松乃 松 仙路
 神極も後跡の酒ま冬枯て 輕松
 徒五位交るる玉の忌船 雀止
 禊舎のわつを二度れあひ込 志お
 尚ほはきて月花雪アッ 花仙
 稽古も舞のぬけつる弱角力 朱貂
 猪手さうして出さ飯 松 跨お
 傍正乃益我ま承さるる山のち 有

小町さうくさきうかうり 竹

橋越て風を誰もおちり月 以竹
 灯天紅又中船あり籠月 舟栞
 まるや灯りよかきも花の長 洛原
 花伝き中子川ありむ花 栞原
 新産をりて産あり花より 栞原
 揚河紅山家子多しむ花中 栞止
 世あそひや燈く一人栞 花伝
 草のむやあそむるふ乃 朱家
 花より乃をわたり風巾 輕栞
 陽よりや又送る果の雪と栞 栞有
 雪や秋木さきも 物とあり 栞産
 鳥目をせけく鳥の柳々子 白栞
 まるやう用くぬちを蕨草子 玉海
 栞くや陽を海を乃乃之 玉海
 産はくや人子訓く他の矣 仙路
 白矣の解とあむあはれ他 饒水
 ち満より花を中乃合衛 曲高

庚申此表 周山口

戸ささうて笑ふ家あり栞也 耕之宮
 花葉より人お月も花夜 浮木
 喜車より弟花かへてさきく 浮木
 七の栞きりし芳ありあり 栞園
 玉伝よ栞もあきぬ貸小袖 栞史
 出り人伝乃京の櫻棠 栞止
 冬個のおよ身さる船子共 三芝
 島は心とくと問ワケ守 芝原
 接りもんあき乃乃お忘 文
 風ら栞披てあされあむる 木
 石栞花のま自一旅茶院 琴
 古き都よあけき月 園
 夏あそむる栞根乃 史
 栞は人の栞はきぬ睦云 止

隣りも隣合さるゝのを白
南北朝乃味方評定 扇
化ありと神人又さしむん 文
業ももまやの木の芽田木 木

新忌で秋實う来る離く事 琴
豆乃百をんも付き 初陸 史
能けりも浮木も折ふ 榎うか 園
降中も家川ありおちら月 芝
さく濁。おもきもあり去の糸 庭
美草や山懐れ何くつらり 止
まらさうり文ささくさうるの樹 木

干草や草花はゆるの珠 数盤 麦園
閑寺や小町を志はく干草 出高

糸穂留カ

乙又益田

庚申の事無

春の時乃次母たいうも女ま粧 魯白
柿も柿そろうの画 屏風 菖蒲
朝日けりも目一也早も活合て 竹節
春梅もより酒は乃あや 一枝坊
三杯を煎もあつめてぬる秋 故舟
そくろちりきさの陽の月 水
あといの麻糸哀を男も文て 葦山
麦うの煮くくう苗を合すり 売免
吉ふあもけり楊子あけさまで 梅更
あ人講をたのむ建ち 赤水
恒り恒り日のあき衆の下 柳志
糸厚くとと田を植るあり 落高
ちうきさす丹志い人のあやむ 白
あ人合おとらみ一おの目 石
依怙ひんさあさる洞の天窓別 山
虫委の孝子とのめて秋葉 志
花咲てま良のちとあさう

乃者乃置了更の世に 坊

尾香乃化秋元乃実上 山

梅をり実乃佛の口うれふ 坊

之とき伊達うくさう梅柳 舟

老人も侍さきさきや花乃去 赤

友とるまき乃よ者のむのあ 而

ま風やるくゆふ縁乃松 逸

解て床さあろつ福秀竹 山

志の柔やあさきそあ乃と 高

大官さ声いさ應きぬきをさ 更

志の柔を列衣て出乃能乃声 志

草まき尾さくくさる勢うか 白

衣箱や巨雄を出る悪は之 白

然あり梅乃中やうあはさる 頂山

皮を乃一松美や乃り花乃花 白梅

正月や男とあるを 悟一

下戸あめを子の越や祝月 世高

柔格男